

日本銀行所蔵・貨幣関係錦絵目録

日本銀行金融研究所

日 本 銀 行 関 係 錦 絵



東 京 名 所 永 代 橋 真 景



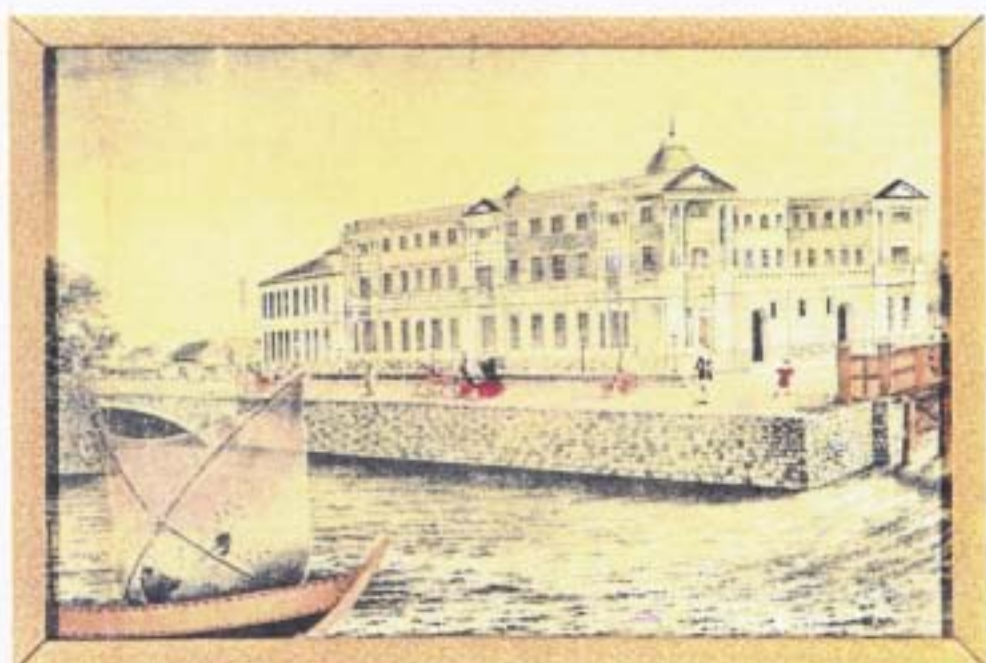
永 代 橋 際 日 本 銀 行 の 雪



日 本 銀 行 落 成 之 図



大日本帝国政府日本銀行全景



日本銀行之図



東京駿河衛国立銀行繁栄図

日本銀行金融研究所委託研究報告 No.4(1)

日本銀行所蔵・貨幣関係錦絵目録

——委託年度 平成元年、担当者 原島 陽——

# 日本銀行行所蔵・貨幣関係錦絵目録

## (目次)

### 解題

1. 金融機関建物	(1) 日本銀行	1頁
	(2) 三井組為替座	2
	(3) 第一国立銀行	3
	(4) 三井銀行	6
	(5) 為替会社	7
	(6) 両替店	7
2. 貨幣関係	(1) 通貨一覧	8
	(2) 鉦山	9
	(3) 造幣寮	10
	(4) 紙幣寮	11
	(5) 満州国	12
3. 富関係		13
4. 風景		15
5. 風俗・風刺・教育・時事		22
6. 芝居・役者・歴史		64
7. 福神・縁起物・金のなる木		77
8. 広告類		124
9. 番付		127
10. その他		131



## 「日本銀行所蔵・貨幣関係錦絵目録」解題

国立史料館  
原島 陽 一

1. 本書に収録された約1500点の絵画資料は、「貨幣」をキー・ワードにして収集されたコレクションである。昨1990年春に筆者はこの全作品の基礎カードを採録する形で通覧する機会を得たので、今回の目録刊行に当り、このコレクションの概要を説明しながら、その資料的な特色や意義について述べることにする。この資料ははしがきに述べてあるとおり旧田中銭幣館より日本銀行に委譲されたものである。従って本来ならばこの絵画資料の評価は銭幣館資料全体の位置づけの中で考えるべきだが、銭幣館自体について十分な知識を持ち合せていないので、ここでは他の収集部門との関連性に触れないことを始めにお断りしておきたい。また、コレクションは収集者の意図との関連において理解すべきものであるが、この点についても確認する手段をもたぬままに、収集資料から推測することに止まったことも断っておきたい。だが、絵画資料だけでも1500点を超える数量をもっており、全貌や意図が明白となった段階でも、以下で述べる絵画資料の意義は増幅されることはあっても、評価が下落することはないと考える。
2. 約1500点の絵画資料は、大部分が江戸時代から明治時代に至る浮世絵版画であり、さらにその大半は錦絵と呼ばれる多色刷木版画である。それが貨幣をテーマにして収集された実像は、巻頭の目次で、ある程度は推測できよう。成果として収集された資料からみる限り、収集者は、直接または間接に貨幣を描出した錦絵を対象としている。中には、貨幣との関係が不明の作品も混入しており、今後その理由を解明しなければならないが、現在のところ例外として扱える範囲内の

量である。

始めに、間接的な表現の作品から説明すると、貨幣の製造・発行・取扱いを業務とする機関や施設、および貨幣を収納する器具類を描いた絵である。本目録の分類項目に従うと、第1章と第2章の大部分と第4章の一部が前者に属し、後者の器具類は第5章以下に分散されている。前者の機関、施設としては、為替座、第一国立銀行、造幣寮、日本銀行などがあり、何れも新首都=東京に出現した洋風高層建築物ということで新名所となり、類似作品が多いものであるが、作者の配剤や点数も一応は満足すべきものといえよう。表題に機関名のない作品は、第4章に編入してあるが、日本橋周辺の風景画の多くは、背景に右の機関の建物が描かれているために収集されたものであり、造幣寮・紙幣寮や米市場が貨幣と密接な関係をもつことはいうまでもない。なお、鉾山については、佐渡金山の絵巻類が他の資料と共に別に保管されている。

第3章の富関係は、間接表示の特殊例で、富突（富くじのこと）の背後には、富札の購入から当籤金までの多様な性格の金銭の存在がかくされている。この中には西日本の数か所の富興行の絵図が集められているが、同一の図柄に地名だけを変えてあるものがある。少なくとも、開催地・催主・規模が違うのに全く同一構造の富会場が設営されることはあり得ない。三図のうち一か所以外は絵空事ということになるが、最悪の場合は三か所すべてが空想の所産かもしれない。

富突興行の実施は事実であるから、他の資料で会場の建造物を解明できればよいが、余り期待はもてない。今のところ、実体は不明のままで、疑わしい三か所の絵図の製作や販売などの理由を考えるほかはない。遠方の情報が伝わらないのを悪用して、同一の図柄にそれぞれの興行の仕法（発行約款）だけを変えて各興行地で売買ないし配布したと考えるのが最も一般的であろうが、各地の富突情報を大坂で取次いだとみる可能性もある。文政頃に美作国津山の富突が大坂で流行した事例が、

この可能性を肯定させる。このほかの考え方もあろうが、直ちに決定するのは困難であろう。ただ、この絵については、各興行地の地元で実景を伝えるものと早合点して珍重される危険があることを指摘しておきたい。絵図に描かれた開催地が確定するまでは、参考用として慎重に扱うべきであろう。資料批判の重要性を改めて喚起させられる問題だが、収集者がそこまで見通して集めたとすれば卓見といえる。それでも、重複を厭わずに同一の図柄を収集しておくことが決して無意味でないことを立証する一例になっている。

間接的表現のうち、貨幣を収納する器具としては、大きいもので千両箱や銀箱、小は財布・巾着の類がある。前掲の金融機関等の建物に比べれば貨幣に近い存在であり、品名ごとに区分を設定して分類するまでもないので、第5章以下の各項に次の直接的表現の分と合せて配列してある。

3. 貨幣を主題にしたコレクションならば、貨幣そのものを描いてある直接的表現を優先させるのが本筋というべきであるが、錦絵で貨幣に関する資料を集めようとするれば、その集め易さや派手さからいって、前掲の間接的表現の作品群が先に目につくのは当然であろう。以下の直接的表現の作品群が加わっているところに、このコレクションの大きな特色があるといっていよい。

直接的に表現した貨幣とは、江戸時代の金銀銭の三貨、明治時代の紙幣と硬貨で、時にその模型ないし玩具が含まれる。貨幣を描いた絵図といっても、通貨一覧のように図解的に貨幣を並べたものだけでなく、風俗図、芝居絵、役者絵、縁起物絵の中に活きた通貨として描かれた絵を中心に、収集範囲は極めて広い。例えば、絵の題名が小判模様の地に記してあるとか、図中の人物の着衣についた家紋が銭形であるなどで、一見しただけでは貨幣との関係を見落としそうな作品にまで及んでいる。以下、各ジャンル別に目立った特徴や、整理中に気づいた点などを



簡単に記しておく。

風俗図では、小判や千両箱の玩具を吊したまゆ玉が、正月や恵方詣の絵の主流になっている。宝引の賭け銭や祭礼の賽銭の描写も多い。新吉原遊廓で金銭を撒く図には二種類あって、一つは紀伊国屋文左衛門が小判を撒いた故事によるもの、いま一つは大晦日の夜に、妓楼のお蔵いに訪れた狐面をかぶった大神楽に対し遊女が銭を投げ与えた年中行事によるものである。こうした故事や俗習が、当時は人々の間にひろまっていたことを知ることができる。

時事物としては、安政二年（1855）の江戸大地震の後に大量に製作された鯨絵、お蔭参りから発展した「ええじゃないか」運動に付随したお札降りの絵、幕末から明治に至る物価騰貴と舶来品輸入を批判した風刺画、数は少ないが明治六年～七年（1872～73）に流行した兎飼育を扱った兎絵などがある。文政四年（1821）のラクダの絵は、日本で始めて公式に紹介された時のものだが、江戸に到着したのは3年後のことで、この絵は長崎に来た情報をもとに作図したらしく、ラクダの背に千両箱を合掛けにしたのは、見立ての一種といえようか。

次に、芝居絵・役者絵では、「玄治店」の切られ与三郎と蝠蟻安との二人が、ゆすり取った金を分配する場面、「梅川忠兵衛」の封印切り、「ひらがな盛衰記」の梅ヶ枝の手水鉢割りなどが著名な舞台であった。「忠臣蔵」では勘平の縞の財布であるが、大石が領民に藩札を正貨に引換えたという実録物も絵になっている。だが、金銭を主題にするとなると、やはり盗賊の登場する狂言が多く、村井長庵や稲葉小僧、女賊では蟻お由や雲切お六といった盗賊達が金銭を略奪する情景で、芝居絵の約半数を占めている。妖怪物の兎雷也もしばしば登場するが、彼には義賊の性格もあるから盗賊物の範疇に入れてもよいかもしれない。金時が千両箱をさし上げて怪力を見せているのは、やや変った素材である。芝居絵には役名があっても狂言名題を確定できないものが残っており、後日に説明する必要がある。また、芝居絵には役者の給金高を列記した

ものがあり、貨幣は描かれていないが金銭を直接感じさせる。それにしても、人気ものやアイドルの収入は今も昔も世間の関心事だったようだ。

福神などの絵は量的に最も多いが、これは福神物を中心にして有卦絵と金の成る木と暦類とに大別できる。有卦絵と金の成る木は共に縁起のよい俗信で、生年を基にした占いで有卦を迎えた日から7年間は吉事が続くというので「有卦に入る」日が重視された。錦絵では文化年間に扱われ始めたといわれ、本目録中の明治三十三年は有卦絵の最下限に近いものであろう。金の成る木は、木の枝に金が実る想像上の樹木の意味で、木を資産、実を利子に見立てたり、「木」を「気」に通じさせて努力する気持が成功をもたらすという教訓に展開した。後には逆に金を失う木が考案されて、金銭に対する陰陽、成功と破滅を示すに至り、更には一本の木を縦に二分して、片側を成る木、片側を失う木に描いたものがある。枝々に貨幣を実らせるのはもちろん、鉢植の土の部分の小判で埋めた絵もあり、縁起ものとして愛用されたようで、鑄銭を杉形に造った文字通りの金が成っている木の模型が遺物として伝存している。

しかし、この系統では福神絵が圧巻である。福神は七福神と少数の福助だが、中では財宝神として崇敬された恵比須、大黒の両天を扱ったものが圧倒的に多い。これらの福神が単独で、あるいは複数で前記の有卦絵や金の成る木と複合し、あるいは宝船や金蔵と組合わされて蓄財・開運を招く縁起のよい絵として利用された。作品の芸術性は必ずしも高いとはいえないし、小児の慰み物に使われることもあり、使い捨てに近い作品だったらしいことは、摺りが粗末なものが多いところにも窺える。しかし、一応は名の知れた絵師によってこれほど多量に製作されていたものが、この収集によって保存されたのは幸いであった。

なお、縁起物などと組合わされた形で、大小暦と略暦との二種の暦が混入している。現在の陽暦と違って陰暦では月の大小が年ごとに違うの

を、判じ絵風に作ったのが大小曆であり、一枚物のカレンダーのように月の大小別と簡単な曆事を記したのが略曆で、これをさらに簡略化して台所の柱にでも貼るように小形の紙の中央に「火の用心」と書いたのが火の用心札である。

第8章の広告の部における主体は引札（現在のちらし広告）であるが、これは前記の福神絵を含めて全国を対象にすれば殆ど無限に近くなるはずで、さすがに収集も限定したのであろう。それだけに、数も少なく、収集意図も不明である。次の第9章の「その他」に指摘することはない。

4. 最後に、様式と絵師との面から概観しておこう。内容による様式の種類は、以上の説明の中で一部を紹介したので煩を避けて省略し、外形的な様式について要約するにとどめる。まず、版式は、前述のように大半は錦絵であるが、錦絵が開発される以前の紅摺絵のほか、藍摺や彩色のない墨刷、明治以後の銅版画と石版画、近年になっての創作版画や複製木版画まである。大きさでいえば、大・小・豎・横、細・長と各種が揃い、続絵も横に並べる二枚続、三枚続と、上下に続ける掛物絵の両方があり、特殊な形では団扇絵と扇面がある。一枚の画面をいくつかに区切った貼交絵、スポットのように挿入したコマ絵、さらに見立絵、判じ絵、異り絵などの技巧図もある。何枚かをセットにした揃物は、不完全品を含めればかなりの数になる。浮世絵の様式からもかなりの種類が集まっている。

絵師は150人以上に及び、20点以上の作品があるのは、三代広重、国芳、三代豊国（二代国貞）、英泉、芳虎、国周、房種、国輝、国政、芳幾、守義の11人である。それぞれ芝居絵や役者絵、または明治開化期の風俗・風景画の点数に比例した当然の結果といえよう。一点のみの絵師にも注目すべきものがあり、多彩さは絵師の面でも発揮される。とくに江戸絵師以外の地方絵師が多いのも特色で、大坂

絵師は貞信、小信を始め英寿・国員・貞広・泉寿・長栄・長秀・半山芳瀧があり、京の芳国、岡山の北嶺、高崎の菫溪、富山の守義、国一などが確認され、全国規模の収集を伺わせる。このうち富山の守義の作品は優品とはいえないが、前記の多作品絵師のベスト10に入るほどである。これは富山の薬売りが暮などに福神絵などを顧客に配った（薬絵と呼ばれる）ことに由来している。

5. 以上、約1500点の絵画資料について、内容や様式、あるいは絵師の面から概観してきた。一体、世間の風俗描写に始まった浮世絵は、後に風景画が加わったとはいえ、社会の経済行為の媒体として使用される貨幣との接点を見出しにくい芸術作品である。その上、貨幣史自体が、日本経済史のなかでやや後発の研究題目であることを考えると、錦絵と貨幣という組合せは、着想の時点で困難さを予想させるのであって、銭幣館がどのような計画で着手したか不明ながら、最初から今日みるような収集作品を予定していたかには疑問が残る。収集しているうちに次第に範囲が拡大したように思えるからである。これを無計画と批難する人もあろうが、私はそうは思わない。コレクションというものは、殆ど常に当初の計画を超過するものであって、またそれ位でないとも興味ある結果を得ることができないのではなかろうか。これはまた、銭幣館の収集活動の終了時期とも関係するのであって、もし第二次大戦が激化した1940年代で終わったものとするれば、それは本意ならずも中断したことになり、戦禍なくそのまま収集を継続できたならどのように展開したか期待がもたれるのであり、実現できなかったのは誠に残念である。今日となっては、収集成果から評価するしかないが、少なくとも現在はこれだけの作品群を収集することが資料的に不可能と思われるだけに、貨幣というキー・ワードによる収集絵画資料としては他に例のない成果であることは確かである。収集が多彩多岐にわたることは、様式や絵師や地域などの多様さをみても納得されよう。なかでも、

福神・縁起物の作品群は、やや副次的な収集であったろうが、ここで収集されなかったら、恐らくこれほど大量に資料として保存されることはなかったと思うとその意義は大きい。いわゆるガラクタやイカモノの趣味に与するものではないが、民俗学でいう「常民の資料」を保存することに関心をもっている私としては、こうした収集資料をそれなりに評価しておきたい。このように意義のあるコレクションであるから、今後も永く保存されるように最善の保存措置を講じる必要があり、一方では広く一般の利用に応じられる方策も確保して欲しく、関係者の一層の努力をお願いしたい。

(1991・2・16 稿)